

異なる協会が結束し、盆栽から山野草、水石まで一堂に会する園芸の祭典。

2012年3月23日～25日、上野にあるグリーンプラザで11回目となる『日本伝統園芸』国際フェアが開催された。天候にも恵まれた今年度は、国内外から例年以上に多くの園芸ファンが集まり、春の風物詩にもなっている。

盆栽から山野草、水石までが一堂に会する園芸の祭典。

『日本伝統園芸』国際フェア」の期間中、会場のグリーンプラザは連日、たくさんの人出で賑わった。同会場でも普段行われているイベントの10倍近いといえるほどである。

「園芸をテーマにするイベントは数多くありますが、このイベントは他のものと違った特色があります。展示される園芸の分野がたいへん広いのです」

そう説明するのは主催した伝統園芸フェア実行委員会 実行委員 内海二郎さん。

このイベントの構成メンバーには、日本盆栽協同組合、日本草月文化振興会、日本小品盆栽協会、(社)日本おもと協会、日本伝統園芸協会、(有)日本山草、日本水石協会の7つの団体が並ぶ。つまり、盆栽から、さつき、蘭、山野草、おもと、水石などが一堂に会する伝統園芸の祭典なのである。

「異なる植物が集まりましたので、普段は盆栽をしている人が、山野草の魅力に気付くきっかけにもなりますし、園芸家間の交流にも役立っています」と内海さんは語る。

会場を見ると屋内会場の上の階には、どっしりとした盆栽が並んだ。どれもすばらしい作品ばかりだ。中には、実持ち・花持ちの盆栽もあり、彩りも豊か。作者の思いと自然の生命力が見事に結実している。

階を下ると、雰囲気はがらりとかわって、おもとがすっきりと健康的な姿を見せる。さまざまな形の葉の中に複雑な班が浮かび、いつまでも見ていたいような気分になる。外では山野草が並び、開放感がすがすがしさでいっぱい

だ。

「異なるものを同時に見比べることで、それぞれの良さがまた浮き上がってくるのでしょう。7つの団体が手を組んでいるからこそできる味わいです」と内海さん。



会場では販売会も実施し、多数の人出で賑わった



多種多様な植物が一堂に集まる伝統園芸の祭典

その効果もあって、朝から晩まで留まっている来場者もいるほどだ。

初心者も、外国人も、著名人もみんなが集う園芸の魅力。

分野が幅広いため、客層も多様である。内海さんの話では園芸ファンは年々増加して、底辺が拡大しているそうだ。このイベントでは初心者にも理解できるよう、各コーナーで実演付の講習会を行ったところ、主婦などにたいへんな人気で入りきれない会場もあった。

もちろん山野草などの販売も行われている。いいものを求めたい人は初日に来場し、逆に最終日に売れ残った商品が安くなるのを見計らって来場するなどいろいろである。

目利きファンになると「このイカリソウは色が変わっていますね」などとプロの専門家も気付かない指摘もする人もいます。

また、国際フェアというだけあって、海外からの来場



外国人客も訪れる等、伝統園芸フェアへの来場者は年々増加している



「伝統園芸フェア」展のチラシ

担当者より



園芸文化を国内外へ幅広く伝えることができました。

伝統園芸フェア実行委員会
実行委員

内海二郎さん

おかげさまでイベントは定着化してきました。園芸文化を広く世界へ伝えるための活動ですので入場料を無料としておりますが、今回はAJOSCのご支援により講習会なども開催でき、より幅広い層の皆様を楽しみ、親しんでいただきました。長い目で見守っていただければ幸いです。

者もたいへん多い。

「日本人よりも好きとっていいかもしれませんよ。ヨーロッパはもちろんですが、アジアからの来場者も増えました。日本で盆栽を勉強して、フランスやドイツで商売をされている方も多くいます。園芸を通して日本人の心も伝わると、この場限りではない交流にも貢献できると考えています」と、内海さん。

盆栽や水石など、日本独特の世界観が外国人には魅力的なのだそう。小さな盆栽を前に腰をかがめて見入っている外国人も多数見られた。また数年前までは圧倒的に多かった韓国人に代わって、今は中国人が増えている。どっさりまとめて買って行くのが中国流のようだ。

一方、芸能人やスポーツ選手も姿を見せる。自宅でも楽しめるとあって園芸ファンの著名人は多いという。

「いろいろな人が、それぞれのスタイルで楽しめるのが園芸の長所です。温暖化や原発問題で環境への関心も高まっています。また土いじりや植物を眺めることでの健康への効果なども知られてきました。身近で誰にでもでき、生活に潤いを与える園芸へのニーズはこれからも高まるでしょう」

今ではすっかり上野の春の風物詩ともなったフェアだが、同実行委員会は今後、もっと大きな場所での開催も視野に入れている。